

## 大学生の大学適応に関する研究Ⅲ

松 井 洋\*・田 中 裕\*\*・中 村 真\*\*\*

### A Study on University Adjustment III

Hiroshi MATSUI, Yu TANAKA, and Shin NAKAMURA

#### 要 約

大学生の大学適応にかかわる要因について検討することを目的に、大学適応や、入学目的、個人特性などについて調査を行った。対象者は東京近郊大学生女子350名であった。

大学適応に関する質問を74項目行い、これを因子分析によって9因子に整理した。因子のうち「退学志向」「大学満足」「授業満足」「不適応」の4因子を問題の要因とし、「授業理解」「入学目的」「友人関係」「個人特性」「勉強意欲」の因子を説明変数とし、4問題要因について説明変数の各々を高低2群を設けた分析、同じく重回帰分析を行った。そして問題につながる3変数の高低を組み合わせで8群を作って大学適応の比較を行った。

説明変数の高低2群の比較と、重回帰分析の結果は、大学適応の従属変数によって、影響する要因の重みが異なること、説明変数のうち「授業理解」「入学目的」「友人関係」の影響が大きいことが多いことを示した。しかし、どの変数を基準にしても、それを説明する変数は複数であった。たとえば「授業満足」は「授業理解」だけでは十分に説明されないということである。

すなわち、大学適応とは学生、大学、友人、そして入学前、入学後など、多くの要因によって影響される問題と言える。

説明変数として重みの大きい「入学目的」「授業理解」「友人関係」の3変数を高低で2分し、3要因の組み合わせで8群を作って比較した結果は、3要因の全てが悪い、あるいは良い時に、それぞれ最も大学適応が悪い、あるいは良いことを示した。また、3要因のうち2要因が良い組み合わせの場合、大学適応は良好で2要因が悪ければ大学適応は良好でない。つまり、問題要因の組み合わせによっては、また、その問題が複数ではないなら、大学不適応につながる何らかの問題傾向があっても、例えば「入学目的が明確でない」、「授業が理解できない」ということがあっても、大学適応が良いこともあるということを検証した。

キーワード：大学適応、大学生、退学

---

\*教授 社会心理学

\*\*教授 生理心理学

\*\*\*江戸川大学・本学前准教授 社会心理学

## 問題と目的

大学進学率が50%を超える現在、大学生の大学適応の問題は一部の青年の問題とは言えなくなっている。松井他（1992）は20年前に、若者の問題の研究の一貫として大学生の学校適応について検討した。そこでは、問題の原因を大学の状況要因と大学生の内面的問題から分析している。

その後20年ほどたって、松井・中村・田中（2010）は改めて大学生の大学適応について調査研究を行った。大学生の大学不適応に影響する要因を検討した結果、「入学目的」、「授業理解」、「友人関係」が大学適応に重要な要因であることを明らかにした。言いかえると“入学目的が明確でない”“大学の授業が理解できない”“大学の友人関係が希薄などうまくいかない”ということが大学不適応や退学志向につながるということであった。

中村・松井・田中（2011）では、大学適応に影響すると考えられる上記の3要因の影響を再検討するために、松井・中村・田中（2010）のデータを再分析することで、3要因の高低の組み合わせによって5群を分類して大学適応について比較した。その結果3要因ともに良好である「大学生生活充実群」は大学満足・適応が高い。ついで、授業理解と友人関係の2要因が良好である「授業友人充実群」の大学満足・適応が高い。つまり入学時の目的があいまいであってもその後の授業の理解や友人関係が良好なら大学生活にかなり満足し適応的であるということがわかった。他方、入学目的、授業理解、友人関係の3要因のうち1要因のみが良好な3群の大学満足・適応は高くない。

この結果は、大学適応について「入学目的」、「授業理解」、「友人関係」が重要な要因であることを示しているが、一方、組み合わせの効果が単純ではないことや、問題のあり方によっては大学適応が可能であることを示唆したものである。

ところで、中村・松井・田中（2011）では、「入学目的」、「授業理解」、「友人関係」の3要因に基づいてクラスター分析を行い、5群を見出して比較検討したが、3要因の高低の組み合わせなら授業理解のみが低く他の2要因が高い群、友人関係のみが低く他の2要因が高い群など、論理的には8群が考えられる。

本研究は、大学適応について影響する「入学目的」、「授業理解」、「友人関係」の高低の組み合わせで8群を作って、要因の組み合わせの効果を比較することで、例えば、入学目的が必ずしも明確ではなかった学生であっても、授業理解を通して大学に満足したり良い適応を達成する方策が可能かどうかを分析する。また、松井・中村・田中（2010）の結果得た知見や、Benesse 教育研究開発センター（2010）の比較的大規模な調査も参考に、質問項目、特に大学

適応・生活に関する項目を加えて調査を行うことによって、大学適応にかかわる要因を明らかにする。

## 方法

### 1. 調査対象者

調査対象者は、東京近郊大学生女子。調査対象者は2009年が183名、2010年が167名で、合計350名。学年は1年生が64.9%、2年生23.6%、3年生8.9%、4年生2.6%である。1年生が多いのは、入学してあまり日のたたない学生を対象とするために1年生の多い共通教育科目において調査を行ったためである。

### 2. 実施時期

最初は2009年、次いで2010年の後期に一般教育の授業中に調査を行った。

### 3. 調査項目

内容は2009年の調査項目を基にして、比較対象のための項目などを加えて調査票を構成した。調査項目の内容は、所属や入試の種類などの対象者特性、住まい、通学時間、アルバイト、サークルなどの大学生活の実態、そして、意識調査項目からなる。意識調査の項目には大学適応、勉学に対する態度、個人特性が含まれる。なお、ここでは意識調査以外の、所属や入試、通学などについては分析しない。全調査項目87項目中、該当する74項目について分析した。分析した調査項目は結果の因子分析の内容のとおりである。回答は「あてはまる」から「あてはまらない」までの4件法で回答させた。

## 結果

### 1. 大学適応の因子分析

大学適応、勉学に対する態度、個人特性についての50項目について因子分析を行った。方法は、最尤法、プロマックス回転である。その結果、表1のように8因子の単純構造を得た。なお、第1因子のなかには、大学適応一般についての項目と、勉強に関する項目の両方が混在する。因子構造としては問題はないが、大学適応の要因を分析する上ではやや因子の意味に濁り、意味の二重性があるとも言えよう。そこで、因子の内容を単純化するために、この第1因

表1 質問項目の因子分析

	因子							
	1	2	3	4	5	6	7	8
	大学満足 * 授業満足	友人関係	授業理解	個人特性	入学目的	相談希求	不適応	勉強意欲
* 大学の勉強に満足	.920							
* 授業楽しい	.677							
* だいたいの授業はわかりやすい	.675		-.311					
* 大学に好感の持てる教員がいる	.659							
* 大学の先生は自分のことを考えてくれている	.644							
大学生生活に満足	.628							
* 大学の授業内容に興味がある	.609							
この大学に入って正解	.555							
大学にくるのが楽しい	.526	.307						
この学科に入って正解	.460				.322			
友人と過ごすのが楽しい		.982						
大学に仲の良い友人		.874						
休みや昼食時間は楽しい		.805						
友人関係に満足		.793						
相談によってくれる友人がいる		.647						
友人と過ごすわずらわしい		-.639						
大学の勉強についていけない			.741					
授業内容難しい			.728					
大学の授業レベル高すぎる			.679					
大学を卒業できないかもしれない			.481				.309	
自信がある				.561				
明るい気分				.549			-.303	
人生に希望				.525				
好奇心が強い				.501				
人生考える				.463			.385	
将来考えたくない				-.398	-.346			
なんとなく大学に入学					-.942			
はっきりとした目的があって入学					.792			
勉強のことについて教えてくれる人がほしい						.858		
相談によってくれる人がいたら良い						.712		
進路についてアドバイスしてほしい						.513		
落ち込む							.571	
疲れを感じる							.505	
大学を休みたくなることがある							.485	
もともと勉強好き								.789
勉強が楽しい								.652
以前から勉強不得意			.302					-.463
分散の%	22.189	9.573	6.866	4.616	3.492	2.620	2.604	1.967
因子間相関		.389	-.165	.144	.549	.116	-.338	.448
			.010	.247	.403	.083	-.420	-.015
				-.380	-.126	.243	.007	-.448
					.240	-.018	-.084	.254
						.152	-.412	.228
							.052	-.046
								-.074

大学生の大学適応に関する研究Ⅲ

表2 第一因子の再分析

	因子	
	1	2
この大学に入って正解	.998	
大学生活に満足	.787	
この学科に入って正解	.756	
大学にくるのが楽しい	.693	
だいたいの授業はわかりやすい		.816
授業楽しい		.656
大学に好感の持てる教員がいる		.575
大学の授業内容に興味がある		.522
大学の勉強に満足	.427	.450
大学の先生はじぶんのことを考えてくれている		.404
大学に来るのは出席のため		-.304
分散の%	41.716	5.932
因子間相関		0.708

子を同じ手法の因子分析で検討してみた。その結果、表2の2因子となった。そこで、以下は全体を9因子として分析していく。この分析方法は松井ら（2009）と同様である。

各因子の項目と負荷量から、表1の第1因子のうち表2の第1因子を「大学満足」の因子、第2因子を「授業満足」の因子、表1の第2因子を「友人関係」の因子、第3因子を「授業理解」の因子、第4因子を「個人特性」の因子、第5因子を「入学目的」の因子、第6因子を「相談要求」の因子、第7因子を「不適応」の因子、第8因子を「勉強意欲」の因子とした。この因子構造と各々の内容は松井ら（2009）と同様である。

**2. 大学不適応・退学傾向について問題となる諸変数と説明諸変数との関係**

大学不適応や退学傾向ということについて、まず、単独質問項目の「退学志向」つまり「大学をやめようと思ったことがある」という質問の回答を選び、加えて、図1、2の因子のうち「大学満足」「授業満足」「不適応」の因子、合わせて4要因を、不満、退学、不適応など大学生活に不適応で否定的な傾向を示す問題傾向の従属変数、つまり問題変数とした。そして、これらの問題の背景となり、影響すると考えられる、問題の原因を説明する独立変数として「授業理解」「入学目的」「友人関係」「個人特性」「勉強意欲」の因子を選び説明変数とした。これらの分類は因子の意味と、松井（2009）の結果から決定した。

そのうえで両者の関係について検討した。方法の一つは説明要因である「授業理解」「入学

目的」「友人関係」「個人特性」「勉強意欲」の因子を中央値にて高低2分した群を造って、4要因の問題変数の値を比較したものである。

もう一つは、4要因の問題変数の各々を従属件数とし、5要因の説明変数を独立変数とした重回帰分析である。

### 1) 退学志向

図1は「大学をやめようと思ったことがある」を従属変数とし場合の比較である、各図の値は各因子の合計を4段階に直して表示してある。図1のように「大学をやめようと思ったことがある」という傾向は「授業理解」「入学目的」「友人関係」の3要因が良好でなく低いと高い。「個人特性」と「勉強意欲」は有意な関係がなかった。

表3は退学志向についての重回帰分析の結果である。強制投入法で5要因全てを投入した場合の結果である。 $\beta$ の値が大きい順に「入学目的」「友人関係」「授業理解」で、次いで「個人特性」も有意な関係があり、「勉強意欲」は有意でなかった。

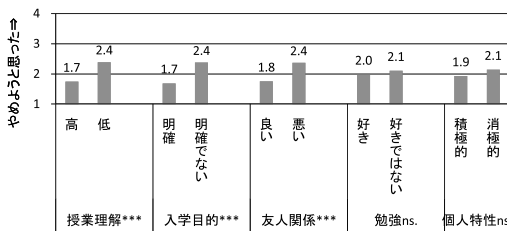


図1 大学をやめようと思ったことがある

	B	標準誤差	ベータ	t 値	有意確率
(定数)	2.659	.557		4.778	.000
友人関係	-.070	.015	-.245	-4.605	.000
授業理解	.091	.024	.213	3.733	.000
個人特性	.073	.026	.161	2.821	.005
入学目的	-.197	.033	-.321	-5.966	.000
勉強意欲	.012	.031	.023	.395	.693

R = .480

### 2) 授業満足

図2は「授業満足」を従属変数とした結果である。「授業理解」「入学目的」「友人関係」「個人特性」「勉強意欲」とも有意であり、5要因すべてについて良好である群は「授業満足」が高い。

表4は「授業満足」についての重回帰分析の結果である。 $\beta$ の値は順に「勉強意欲」「友人関係」「入学目的」で有意である。「個人特性」、そして「授業理解」は有意ではなかった。

### 3) 大学満足

図3は「大学満足」を従属変数とした結果である。「授業理解」「入学目的」「友人関係」「個人特性」「勉強意欲」の5要因すべてについて有意であり、これらが良好であると「大学満足」は高い。

表5は「大学満足」についての重回帰分析の結果である。 $\beta$ の値は順に「友人関係」「入学

大学生の大学適応に関する研究Ⅲ

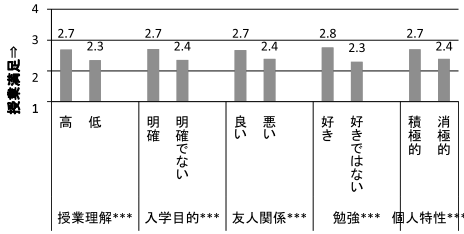


図2 授業満足

表4 授業満足重回帰分析

	B	標準誤差	ベータ	t 値	有意確率
(定数)	5.228	1.663		3.144	.002
友人関係	.200	.045	.221	4.427	.000
授業理解	-.087	.073	-.064	-1.192	.234
個人特性	.033	.077	.023	.431	.667
入学目的	.341	.099	.174	3.459	.001
勉強意欲	.688	.094	.393	7.349	.000

R = .574

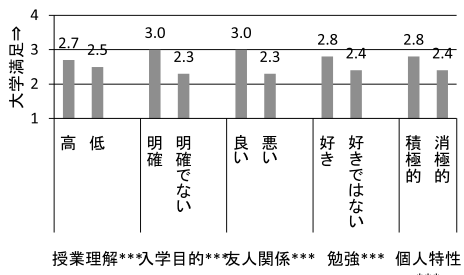


図3 大学満足

表5 大学満足重回帰分析

	B	標準誤差	ベータ	t 値	有意確率
(定数)	.312	1.327		.235	.815
友人関係	.339	.036	.429	9.363	.000
授業理解	.076	.058	.065	1.307	.192
個人特性	-.097	.061	-.078	-1.575	.116
入学目的	.655	.079	.387	8.308	.000
勉強意欲	.316	.076	.206	4.144	.000

R = .654

目的」「勉強意欲」で、「授業理解」「個人特性」は有意でなかった。

4) 不適応

図4は「不適応」を従属変数とした結果である。「授業理解」「入学目的」「友人関係」「個人特性」「勉強意欲」の5要因すべてについて有意であり、これらが良好であると「不適応」傾向は低い。

表6は「不適応」についての重回帰分析の結果である。 $\beta$ の値は順に「授業理解」「友人関係」が有意であった。他は有意でなかった。また、Rの値が小さく、説明する変数の数も説明率も低い。

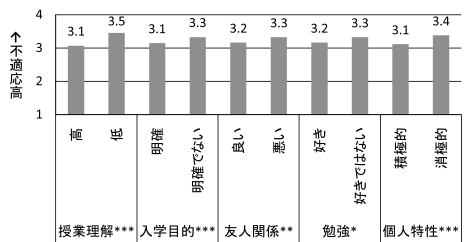


図4 不適応

表6 不適応重回帰分析

	B	標準誤差	ベータ	t 値	有意確率
(定数)	5.255	.896		5.863	.000
友人関係	-.067	.024	-.155	-2.750	.006
授業理解	.148	.039	.227	3.742	.000
個人特性	-.045	.041	-.066	-1.095	.274
入学目的	-.086	.053	-.093	-1.633	.103
勉強意欲	.002	.050	.002	.033	.974

R = .369

### 3. 問題の原因の組み合わせによる効果

以上のように「入学目的」「友人関係」「個人特性」「勉強意欲」の因子を中央値にて高低2分した群を造って比較した結果。5因子の要因はすべて「大学満足」「授業満足」「不適應」と関係があった。しかし「退学志向」については「授業理解」「入学目的」「友人関係」は有意な関係があったが「個人特性」「勉強意欲」の因子については有意な関係がなかった。また、「退学志向」「大学満足」「授業満足」「不適應」を従属変数として「授業理解」「入学目的」「友人関係」「個人特性」「勉強意欲」の因子を独立変数とした重回帰分析を行った。結果は問題変数によって説明変数は異なることがあった。

以上をふまえて、大学不満・不適應・退学傾向を説明する要因の組み合わせ効果について検討するにあたって、「退学志向」を含めた問題と関係があった「授業理解」「入学目的」「友人関係」の3要因の組み合わせで検討することとした。ここまでの分析で、この3要因が複数の問題変数と最も関係があるからである。そこで、この3要因の高低を組み合わせで8群を設けて「退学志向」「大学満足」「授業満足」「不適應」の値を検討する。

図5は「退学志向」つまり「大学をやめようと思ったことがある」傾向を比較した結果である。分析は一元配置分散分析（Duncanの多重比較）である。図5のように「大学をやめようと思ったことがある」傾向は群間に大きな差がある。多重比較の結果からみると「授業理解」「入学目的」「友人関係」の3要因とも低い群の「退学志向」が強いことは当然として、この3要因のうち2要因が低い群はやはり「退学志向」が強い。反対に、要因がともに高い場合は「退学志向」が強い。「授業理解」「入学目的」「友人関係」の3要因のどれが一番効果的なのかということは一概には言えない結果である。これは、高低2群の分析や重回帰分析の結果と共通することである。

また、3要因のうちどれでも2要因が悪い場合にはひとまとまりの「退学志向」が強いグループ

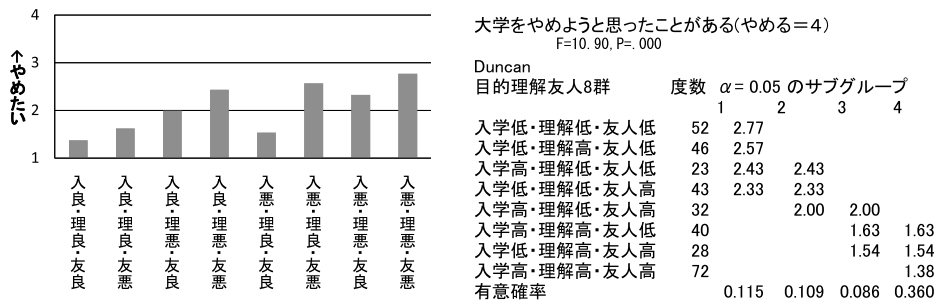


図5 大学をやめようと思ったことがある



大学生の大学適応に関する研究Ⅲ

プになってしまう。1要因だけが悪く他の2要因が良い場合には、反対に「退学志向」はむしろ良いグループになる。

図6は「授業満足」傾向を比較した結果である。図6のように「授業満足」傾向は群間に有意な差がある。多重比較の結果からみると「授業理解」「入学目的」「友人関係」の3要因とも一貫して高いと「授業満足」が高く、一貫して低いと「授業満足」は低い。3要因の比較をすると、3要因のうち2要因が高いか低いかという群が3要因一貫して高、あるいは低という群に続く。そして3要因のうち「授業理解」が特に有意に大きな影響をしているとは言えず、「入学目的」の高低も同様の効果がある。しかし、「友人関係」はこの2要因に比べると「授業満足」傾向への影響は大きくない。つまり、「授業満足」には「授業理解」と「入学目的」の影響が大きいと言える。

また、ここでも前項同様に3要因のうちどれでも2要因が良い場合には「授業満足」が良いグループになり。1要因だけが良い場合には、「授業満足」は比較的悪いグループになる。

図7は「大学満足」傾向を比較した結果である。図7のように「大学満足」傾向は群間に有

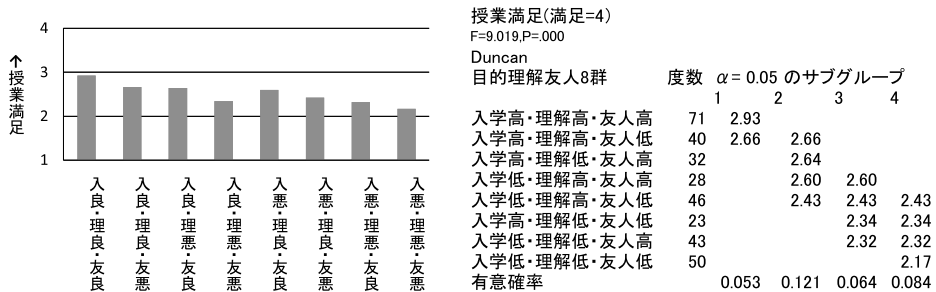


図6 授業満足

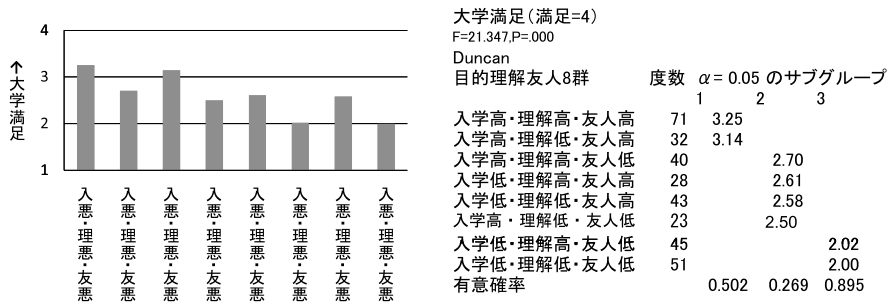


図7 大学満足

意な差がある。多重比較の結果からみると「授業理解」「入学目的」「友人関係」の3要因とも一貫して高い群は「授業満足」が高く、反対に一貫して低い群は低いことは明確である。これはこれまでの分析と同様である。他方、3要因の比較をすると、3要因のうち2要因が高いか低いかという群が3要因一貫して高か低かという群に続く。そして3要因のうち「入学目的」と、「友人関係」がともに影響が大きい。ここでは「授業理解」はこの2要因に比べると「大学満足」傾向への影響は大きくない。

また、ここでも前項同様に3要因のうちどれでも2要因が良い場合には「授業満足」が良い強いグループになり。1要因だけが良い場合には、「授業満足」は比較的悪いグループになる。

図8は「不適応」傾向を比較した結果である。「不適応」傾向は群間に有意な差がある。多重比較の結果からみると「授業理解」「入学目的」「友人関係」の3要因とも低いか高いかという一貫した群は「不適応」が低い、あるいは高いことが明確であることは他の分析と同様である。他方、3要因の比較をすると、「授業理解」の高低が「不適応」の得点に第一に影響する。「授業理解」高で、「友人関係」も高である2群の「不適応」が低いように、「友人関係」が次いで影響が大きい。「授業理解」はこの2要因に比べると「不適応」傾向への影響は大きくない。

「不適応」については「授業理解」が悪いと、他の2要因が良い場合でも「不適応」傾向が強くなる。これは他の基準の場合と異なる。

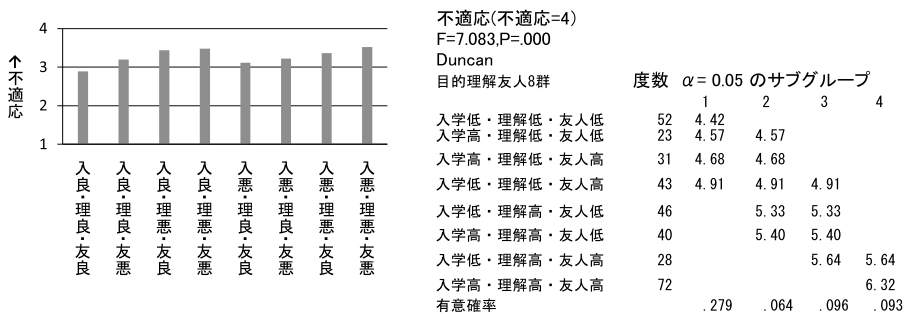


図8 不適応

### 考察

大学適応とそれにかかわる要因について、松井(2009)の項目にベネッセ(2010)などを参考に調査項目を加えて作成した74項目を調査した結果は8因子構造であり、この構造は因子数、その内容ともに松井・中村・田中(2010)とまったく同じであった。本研究はこの研究に

質問項目を加えて50項目から74項目に増やしている。増やした項目は大学の勉強について予習や試験また図書館や学食などまで学生生活に関する項目が中心であった。このような追加をしてもなお因子構造が基本的に変わらないことは、大学適応にかかわる要因はこの結果で示された内容で考えられるということを示している。

次に、大学適応を決定する要因について分析した。そのために上記因子などより大学適応不適応に関する要因、問題変数と、それを説明する要因、説明変数を決定した。大学不適応や退学傾向ということについての変数として、まず、単独質問項目の「退学志向」つまり「大学をやめようと思ったことがある」という質問の回答、それから、「大学満足」「授業満足」「不適応」の因子、合わせて4要因を、不満、退学、不適応など大学生生活に不適応で否定的な傾向を示す問題傾向の従属変数、つまり問題変数とした。そして、これらの問題の背景となり、影響すると考えられる、問題の原因を説明する独立変数として「授業理解」「入学目的」「友人関係」「個人特性」「勉強意欲」の因子を選び説明変数とした。この分類の根拠は因子の内容と松井(1992)、松井ら(2010)に基づくものである。そのうえで、説明変数の高低2群を設けた分析、これらによる重回帰分析、そして問題につながる変数の組み合わせの分析を行った。

まず、「退学志向」を問題の基準とした場合「入学目的」「友人関係」「授業理解」の3要因の説明力が大きい、そのうちどれが最も大きいのかということについては明らかにならない。つまり「大学をやめたい・・・」という意識には複数の要因が影響するということが、それは「入学目的」のような入学以前からの問題、「授業理解」のように大学の側に重点があると思われる問題。そして、「友人関係」のような、勉学や教育それ自体とは離れて問題が影響するということである。付け加えれば、大学側の努力のみによって解決できうる問題でもないということを示唆する。

「授業満足」を基準とした場合、「授業理解」「入学目的」「友人関係」「個人特性」「勉強意欲」がみなそれに影響するとは言える。しかし、どの要因が重要なのかということについては一概には言えない。重回帰分析の結果は「勉強意欲」「友人関係」「入学目的」で有意で、「個人特性」、「授業理解」は有意ではなかったが、3要因組み合わせの分析では、「授業満足」には「授業理解」と「入学目的」の影響が大きいことを示していた。このことは授業に満足すること＝授業理解ではなく、「授業理解」は関係ないわけではないが、入学前からの「入学目的」や「勉強意欲」も大いに影響することと言える。

「大学満足」を基準とするとやはり「授業理解」「入学目的」「友人関係」「個人特性」「勉強意欲」の5要因すべてについて有意な関係があり、大学に満足するかどうかについては多くの要因が影響していると言える。要因の影響の大きさを比較すると「授業理解」はそれほど重み

が大きくなく、相対的に「入学目的」「友人関係」の要因が重要である。つまり、大学満足感は大学の側の要因や努力より学生の入学前の態度やコントロールしにくい友人関係が大きく影響するものである。

「不適応」を基準とした場合「授業理解」「入学目的」「友人関係」「個人特性」「勉強意欲」の5要因すべてについて有意な関係がある。要因の中では「授業理解」「友人関係」が相対的に重い要因であった。ただし、「不適応」を基準とした重回帰分析の結果はここで用いた変数による説明率が低いことを示しており、「不適応」感は多分多くの様々な、また人によって異なる要因に影響されると思われる。

以上のように大学適応に影響する要因について「退学志向」「大学満足」「授業満足」「不適応」の4要因を従属変数として各種分析を行ったが、従属変数によって影響する要因の重みが異なるということはあったが、共通していることはどの変数を基準にしてもそれを説明する変数は複数であるということである。たとえば、「授業満足」を基準とした場合に「授業理解」が最も重要かと言えば必ずしもそうではなく、「勉強意欲」や「入学目的」のような授業が始まる前からの要因も重要なのである。その意味で、大学適応とは学生、大学、友人、そして入学前、入学後の多くの要因によって影響される問題なのである。

ただし、大学適応に複数の要因が影響すると言っても「入学目的」「授業理解」「友人関係」の3要因の重みは相対的に大きかった。この結果は松井・中村・田中(2010)と共通している。これら3要因は大学生の大学適応を考える場合の基本的要因と考えられるだろう。

「入学目的」「授業理解」「友人関係」の3要因が重要だとしても、3要因を満足させることが大学適応の必要条件であるのだろうか。「入学目的」「授業理解」「友人関係」の高低の組み合わせによる分析を行ったのは、たとえば入学目的が明確でないと大学適応が悪いという結果があるとする。実際これは事実である。それはそれとして、この結果だけでは、入学目的が悪いと大学生活がうまくいかない。それはしようがない決定事項だ。ということにもなりかねない。そこで、では入学目的がよろしくない場合は、おおむねいつも大学適応が悪いのか、他のたとえば友人関係が良ければ、入学目的が悪くとも大学生活に適応できるのかということを確認したかったからである。そしてそれは有効な対策にもつながると思われるのである。この試みは、中村・松井・田中(2011)のアイデアであったが、この研究ではクラスター分析による群わけを行ったために理論的に考えられる組み合わせ条件を検証しているわけではない。そこで本研究では3要因の高低の組み合わせでこれを確認しようとしたわけである。

3要因の組み合わせで8群を作って比較した結果は、3要因の全てが悪い、あるいは良い時に大学適応が悪いあるいは良いということが各基準で明らかになった。すなわち、「入学目的」

「授業理解」「友人関係」の3要因は大学適応を説明する基本的な要因と言える。

他方、例えば「入学目的」が悪い場合でも「授業理解」と「友人関係」が良いような、要因は悪いが2要因は良いといった場合は、3要因ともに良い場合に近い良好な大学適応を示すのである。ただし、3要因のうち2要因が良ければ大学適応に良い結果が、2要因が悪ければ大学適応に悪い結果があるということが「不適応」を基準とした場合以外には一貫していた。つまり、問題要因の組み合わせによっては、その問題が複数ではないなら、大学不適応につながる何らかの問題傾向があっても、大学適応が悪いとは限らず良いこともあるということを検証した。ただし、基本3要因のうち2要因が悪い場合には大学適応が良いということは少ないように、大学適応の基本的説明要因の一部に問題のある場合は良好な適応が可能ということであって、いくつもの要因で問題があるならやはり大学適応は容易ではない。

以上のことは本研究の目的である、問題要因の組み合わせによっては、問題傾向があっても、大学適応が良いこともあるのではないかということを中心に検証したと言えよう。つまり、大学適応は大学入学時の態度や授業だけで決まるものではなく、言い換えれば、何か問題があっても適応のための方策がある場合も多いということを示している。

## 文献

- 松井 洋, 1992, 「大学生の学校適応と授業 態度に関する研究」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第3巻第2号, pp.147-165.
- 松井 洋・中村 真・田中 裕, 2010, 「大学生の大学適応に関する研究」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第21巻1号, pp.121-133.
- 松井 洋・田中 裕・中村 真, 2011, 「大学生の大学適応に関する研究」, 『平成22年度川村学園女子大学教育研究奨励報告書』, 全59頁.
- 中村 真・松井 洋・田中 裕, 2011, 「大学生の大学適応に関する研究Ⅱ—入学目的, 授業理解, 友人関係でみた対象者のタイプと大学不適応との関連—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第22巻第1号, pp.85-94
- Benesse 教育研究開発センター, 2010 大学生の学習・生活実態調査報告書.